

丹沢山地におけるオオアカゲラと オオコノハズクの自動撮影記録

鈴木 圭・安藤 元一

Kei Suzuki and Motokazu Ando: Record of *Dendrocopos leucotos* and *Otus lempiji* by Sensor Photography in the Tanzawa Mountains

はじめに

オオアカゲラ *Dendrocopos leucotos* およびオオコノハズク *Otus lempiji* は日本ではほぼ全国に留鳥として生息する（浜口ほか，1998）。環境省によるレッドリストでは希少種には含まれていないが，神奈川県ではオオアカゲラは繁殖期，非繁殖期共に絶滅危惧Ⅰ類，オオコノハズクについては繁殖期が絶滅危惧Ⅰ類，非繁殖期が希少種に指定されている（加藤ほか，2006）。またオオアカゲラは樹の高いところで採食や営巣するため，オオコノハズクについては冬期以外は森林中に生息し，他のフクロウ類と違って大きな声で鳴かないため発見困難である。今回，丹沢山地札掛において自動撮影カメラによる調査を行ったところ，オオコノハズクおよびオオアカゲラが1例ずつ撮影されたので報告する。

撮影された地点と時期

筆者らは樹上性哺乳類の樹木利用を調べることを目的として，丹沢山地札掛（35°26′～27′N，139°12′E）の樹高10m程度の溪畔林とそれを取り囲む樹高25m程度のスギ *Cryptomeria japonica* やヒノキ *Chamaecyparis obtusa* の植林地において自動撮影カメラを用いた調査を行った。調査は2007年6月2日から2008年6月27日まで，1年を通じて自動撮影カメラ（麻里府商事製 Field note IIa）を，上記の溪畔林や人工林に計66カ所，延べ2,176カメラ日間設置した。カメラはいずれも地上高2～3mの樹幹に取り付け，2m程離れた近隣木の樹幹が撮影されるよう，光軸を水平にセットした。

その結果，調査期間を通じて哺乳類が103枚撮影されたほか，鳥類も20枚撮影された。撮影された鳥類はヤマガラ *Parus varius* 11枚，シジュウカラ *Parus major* 3枚，オオアカゲラ，アカゲラ *Dendrocopos major*，アオゲラ *Picus awokera*，カケス *Garrulus glandarius*，オオコノハズクおよび不明種が各1枚ずつであった。キツツキ類はいずれも幹にとまっている状態で撮影され，カケスは枝上で，その他の鳥類はいずれも空中を飛翔している姿が撮影された。

オオアカゲラが撮影されたのは沢沿いの広葉樹であった。撮影された個体（図1）には背面部に逆ハの字形の大白斑はみられず細かい白斑が密にある。さらに目の周りの白い模様が首の白い模様と繋がっている。類似種であるアカゲラの背面部にはオオアカゲラにはみられない逆ハの字形の大白斑がみられ，目の周りとの首の白い模様が繋がっていない（浜口ほか，1998）。これらのことから本個体をオオアカゲラと同定した。また頭部に赤い模様がみられないことから雌と考えられる。撮影日時は2007年8月3日午前7時25分であった。

オオコノハズクが撮影されたのは，沢沿いの広葉樹であった。撮影された個体（図2）の次列風切羽をみると，内弁に白い帯状の横斑がみられ数も6本程みられる。オオコノハズクの次列風切羽には白い帯状の横斑が6本程みられるが，コノハズクのそれには先端から基部に向かって大きくなる白色の円い斑が4～5個みられる（高田・叶内，2004）。このことから本個体をオオコノハズクと判断した。撮影日時についてはカメラ不具合のために正確にはわからないが，フィルム交換の記録から2007年6月11日から7月5日の間であった。

両種の撮影場所は標高約500～600m，沢沿いで下草がまばらな，樹高10～15m程度のフサザクラ群落と樹高25m程度のスギ・ヒノキ植林地の境目であった。



図1. 撮影されたオオアカゲラ。



図 2. 撮影されたオオコノハズク。

これまでの確認事例

神奈川県内における両種の観察記録は、日本野鳥の会神奈川支部（2002, 2007）によると、1977～2000年の間に得られた13万件以上の鳥類観察記録のなかでオオアカゲラは200回以上、オオコノハズクは17回観察され両種とも繁殖も確認されている。しかし2001～2005年の間に得られた4万件以上の鳥類観察記録のなかで、オオアカゲラは夏季に1回、オオコノハズクは冬季に2回観察されただけである。

丹沢山地におけるオオアカゲラの報告についてみると、石棚山山頂付近や堂平付近など標高1,000m以上のブナを主体とする落葉広葉樹林（山口ほか, 1997, 2007; 日本野鳥の会神奈川支部, 2002, 2007）で多く観察され、本調査地のような標高500～600m程度の人工林付近における観察は少ない（日本野鳥の会神奈川支部, 2002, 2007）。また繁殖については、過去には報告がある（平田・山口, 1997; 日本野鳥の会神奈川支部, 2002）が最近はなく（平田・山口, 2007; 日本野鳥の会神奈川支部, 2007）、生息環境の減少により繁殖個体は激減しているとされる（加藤ほか, 2006）。

一方、丹沢山地におけるオオコノハズクの報告についてみると、6月に宮ヶ瀬において死亡した幼鳥を拾得した1例（青木, 1997）、4月に標高500m程度に位置する山荘前のミズキに架設した巣箱における繁殖が1例（山口ほか, 2004）および本調査地である札掛においてスギの樹洞で繁殖が観察された1例（西川・山口, 1998）などがある。

また山口県においてもオオコノハズクが本調査地と似た環境である、林床がまばらでスギやヒノキの人工林とシイやクヌギなどの広葉樹林が隣接する地域で繁殖した事例が報告されている（小林ほか, 1999）。これらのことから、現在でも札掛地域において本種が繁殖を行っている可能性がある。

近年は自動撮影カメラによる調査が各地で一般的に行われているが、フクロウ類が撮影されることは稀である。今回は樹幹を撮影できるような角度にカメラを設置したために、こうした撮影が可能になったと思われる。

謝 辞

本調査は諸戸林業株式会社のご厚意により実施できた。写真からの種同定は、神奈川県立宮ヶ瀬ビジターセンター館長の青木雄司氏、相模原市立博物館学芸員の秋山幸也氏、財団法人日本鳥類保護連盟調査室の藤井幹氏および神奈川県立丹沢湖ビジターセンター館長の山口喜盛氏に全面的にご協力いただいた。ここにお礼申し上げる。

引用文献

- 青木雄司, 1997. 丹沢山中で拾得したオオコノハズク幼鳥の死体について. BINOS, 4: 91-92.
- 加藤ゆき・浜口哲一・平田寛重・石井 隆・秋山幸也, 2006. 鳥類. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久編, 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp.253-255. 神奈川県立生命の星地球博物館, 神奈川.
- 小林繁樹・深町 修・藤井君子, 1999. オオコノハズクの山口県鹿野町での巣箱繁殖例. STRIX, 17: 181-185.
- 浜口哲一・盛岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦, 1998. 山溪カラー名鑑 日本の野鳥, pp.344-376. 明光社, 東京.
- 平田寛重・山口喜盛, 1997. 丹沢山地の鳥類. 財団法人神奈川県公園協会 丹沢大山自然環境総合調査団企画委員会編, 丹沢大山自然環境総合調査報告書 丹沢山地動植物目録, p.9. 神奈川県環境部, 神奈川.
- 平田寛重・山口喜盛, 2007. 鳥類 Birds. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山動植物目録, pp.78. 財団法人平岡環境科学研究所, 神奈川.
- 日本野鳥の会神奈川支部, 2002. 20世紀神奈川の鳥 — 神奈川県鳥類目録 IV —, pp.167-183. 日本野鳥の会神奈川支部, 神奈川.
- 日本野鳥の会神奈川支部, 2007. 神奈川の鳥 2001-05 — 神奈川県鳥類目録 V —, pp.102-107. 日本野鳥の会神奈川支部, 神奈川.
- 西川敦人・山口喜盛, 1998. 神奈川県におけるオオコノハズクの繁殖初記録. BINOS, 5: 57-62.
- 高田 勝・叶内拓哉, 2004. 原寸大写真図鑑羽, pp.186-191. 文一総合出版, 東京.
- 山口喜盛・石井 隆・浜口哲一・青木雄司・白鳥勝洋・平田寛重・斉藤常實・西ヶ谷修一・岩佐昌夫・川手隆生・荒木尚登・藤井 幹・望月和芳・佐藤誠三・四角目勝二・井上 基, 1997. I 鳥類. 財団法人神奈川県公園協会 丹沢大山自然環境総合調査団企画委員会編, 丹沢大山自然環境総合調査報告書, pp.565-591. 神奈川県環境部, 神奈川.
- 山口喜盛・石井 隆・葉山嘉一・佐々木祥仁・川手隆生・藤井 幹・加藤ゆき, 2007. III 鳥類. 丹沢大山総合調査団編, 丹沢大山総合調査学術報告書, pp.197-198. 財団法人平岡環境科学研究所, 神奈川.
- 山口喜盛・湯沢義信・湯沢八千代, 2004. ひとつの巣箱を利用した動物たち. リストムササビ, (14): 8-10.